

認知症ケア まりホーム内海（広島県）

社会福祉法人まり福祉会

介護職でも可能な「予防」活動

ホーム長 渡邊美香



まりホーム内海は、平成19年に設立され、社会医療法人社団沼南会沼隈病院と常石医院と医療連携を取っている、2ユニット型のグループホームである。

ケアプランの充実を図るためには、家族からさまざまな情報を収集し、そこで暮らすため地域とのかかわり方を考えていく必要がある。ご本人のQOL向上や、その方らしい生活スタイルを築くための支援を考える。

その地域で暮らすための取り組み方法と内容

入居前の住居から当ホームへと住環境が変わると、慣れない環境に加えて馴染みのない方との共同生活が始まる。地域密着型と称していても、その方にとっては初めての場所で、ご近所も見知らぬ人たちがばかり。まずは、地域を知り生活するために、ご近所回りをしたり挨拶に出向いた。

馴染みの関係性を築くためには、当ホームを知ってもらいたいとの思いから、ホーム運営推進会議の参加やお茶会のお誘い等、足を運んでもらえる機会もつくった。帰られる時は、「また、きてみたい」と思っただけのように、ちょっとした茶話会もしている。

その人らしい生活のスタート

グループホームで生活するうえで、ケアプランの充実を図ることは、その人らしい生活スタイルを築くために重要だ。しかしニーズを引き出すのに情報提供を依頼した時、入居者の方の趣味や特技を聞いても、ご存知ない家族もある。逆に毎日していた草取りであったり、大正琴の習い事に行かれていた情報をいただく。しかし、入居後も、それらを成し得ることができかどうかは別である。住環境が違うからだ。そのため、その方を取り巻く関係者から情報を得る内容として、日課としてきた事や、生活環境がどうであったかを聞き、可能な限りお宅を訪問している。今後の生活に対するヒントを探るためにだ。

想像を覆されることもある。アスファルトの敷地で草1本もない所では、草取りはできないと残念な気持ちを察したと思い

きや、言葉に出てくるのは、「草取りは嫌いじゃった」と驚きの言葉。何事をするにも、目的はあるもので、人目を気にして草取りをする方があれば、草の匂いが好きで草取りされる方もいる。さまざまな生活環境が明かす実態と本音。「人っておもしろい」と感じた瞬間だった。新たな環境で人生を再出発するのだと改めて感じた。

時に、家族からいただくこんな言葉に安堵する。「ここにくるたびにうちのお母さんの笑顔を見ていると、幸せなんじゃろうなって分かりますよ」と。ご家族の満足度評価で得られるコメントは、介護者側としてはモチベーションを上げる一つの要素となる。

包括支援こそ入居者の生活を支える

人手不足で、ケアがおろそかになりがちの時がある。事情を察知する家族が「受診は私どもで行きますよ」と快く言ってくださる。また、ある時、どこからともなく「ブーン」と電動ノコギリの音が早朝から鳴り響き出すことがあった。ご近所さんが、「自分の家をきれいにするついでじゃけえ」と言って、ホーム玄関先の草を刈ってくださっていたのだ。

支援とは、さまざまな人たちが包括的にしてこそ、一人一人の生活が成り立つのだと改めて理解できる。これら生活実態の報告の方法として、遠方の家族への状況報告は、毎月の広報誌やその方にまつわる出来事をメッセージに起こしている。

最近では季節の挨拶をハガキで出され、返信をお孫



沼隈町と内海とを結ぶ内海大橋

さんやお嫁さんからもらうと、「孫からじゃ」と言っ
て老眼鏡を手にもうれしそうに見ている。心豊かな時を保つ秘訣だ。時には下肢筋力維持のため、運動中にすり傷を負うことがあった。ご家族に報告すると、「100歳近うなって運動に参加できとること事態不思議で、少々の打身なんか大丈夫ですよ」と、すぐにご理解いただける。継続的に、誕生日のたびにプレゼントでお祝いしてくださる家族もいらっしゃる。

近所住民宅を訪問した時に、庭の花をもらい「ただいまー。こんなのいただいたのよー。職員さん活けていてねー」と誇らしげな爽やかな表情で帰ってこられる。穏やかな空間が漂う一場面だ。

健康維持するための取り組みと成果

ニーズに加えて、健康の保持や機能維持することも重要である。最近のある日の昼食時間。

「この入居者さんたち、食事介助する人、一人もおらん。すごいね」。2カ月に1度の管理栄養士の介入日。自力摂取されている入居者の何気ない食事の様子に、栄養士からの言葉だった。確かに入居後5年以上経過し、95歳前後になられた方々が半数以上いる。何らかの形で持病の悪化等で入院に至っても、再び機能回復し、自力で何とかできることをされながら、もとの日常生活に近いところまで戻っていることに気づかされた瞬間だった。

ある時、持病の経過を把握しながら、何か介護職員でもできることはないか、職員皆で考えてみた。繰り返し肺炎発症から入院に至ってしまった方、持病の胆嚢炎悪化からの入院に至る方。食欲不振で脱水、点滴施行で回復するが再び点滴施行。入退院を繰り返されながら、何とかホームの生活に戻られるも、入院のたびに認知症状の悪化も深刻な課題でもあった。

そこで、入院中の治療に関して興味を抱きつつ、実際入院したらどんな体制で治療が開始されるのか、普段のケアサービス内容から持病悪化防止策はなかったのか等、専門職や主治医とのかかわりの中から探ることとした。

食事に関しては、管理栄養士から助言をもらった。胆嚢炎悪化防止のために取り組んだ、油物を控えた調理方法とカロリー制限。うがい困難な方や肺炎予防のために取り組んだ、お茶での口腔ケア。水分補給困難な方にゼリーや果物等で水分に代わるものを提供した

りする。あるいは、食欲増進のためにも、その方に合ったテーブルの高さで食べてもらえるように、福祉用具販売の方からデモ機を借りて対応してみた。

主治医指示の下、専門職の意見に耳を傾け、すべて任せるのではなく、私たち介護職員でもできる医療的分野に近く、関係する部分に関しても率先して行ってきた。家族の次に身近な存在であり、認知症専門職として携わっている私たちだからこそできるケアだと考える。

理学療法士にも、随時適切な用具の活用方法の相談をして、自立支援に向けて実践に臨むようにしてきた。結局昇降テーブルは購入して、生活環境を整えて対応することとした。

成果として、取り組み後、肺炎で入院を繰り返されていた方は1度も入院されることはなくなった。

食思不振で一部食事介助の方は、昇降テーブルに代えた後、自力摂取できるようになり、ほぼ完食されるようになった。胆嚢炎再発防止に取り組んできた入居者も、その後永眠されたが、持病悪化で入院されることはなかった。それぞれに取り組んできた成果だ。

残った課題・今後目指す方向

認知症悪化予防と健康維持も、今後の課題である。足腰が徐々に衰え始めてくると、外出するのも気分が乗らなかったり、痛みが生じてきて引きこもりがちになりかねない。心身のケアも合わせて考える必要がある。だからこそ、家族や馴染みの方々とかかわりや信頼関係を継続し続けることは重要なのだ。

最後に、認知症の方が、いつかふと面会にこられた家族に会った時、歳をとられた息子さんや娘さんを見て、「この人は誰だろうか」と分からなくなる日がくるかもしれない。その時に交わす言葉が「はじめまして」であっても、私たちは自然体でいられるようでありたい。その方を取り巻く人々が、認知症ケアについて理解の深い人になっていて、笑顔でかかわることができるようお願いしたいし、そうありたいと考える。

